

『新しい中世』第7章

0. 現在の世界システム(=相互依存)

近代世界システムにおいてシステム内の諸要素は既に相互依存していたが、現在は相互依存の密度が進展し、相互依存のあり方も従来とは異なっており、相互依存に対処するための様々な現象が生じている

→相互依存という点では共通しているが、現在の世界システムは近代世界とは異なったもの(=新しい中世)になっている

1. ヨーロッパ中世

①政治面

- ・例えば神聖ローマ皇帝、王侯、教会、都市……など、政治的アクターは無数に存在
- ・無数に存在する主体間の関係や権利関係は複雑に入り組んでおり、公私の区別は極めて曖昧
- ・各主体は固定的な領土を持たない
- ・国内政治と国際政治の区別が困難

②イデオロギー面

- ・キリスト教普遍主義のもとローマ教会の権威は絶対的
- ・キリスト教神学に基づく階級的秩序
- ・正統な支配者による正義のための戦争は肯定

【実態】

- ・権威と権力の分離(ローマ教皇=主体の一つに過ぎない)
- ・私戦の頻発(戦争の公私を区別することは困難)

2. 近代世界システム

①政治面

- ・行為主体としての「近代主権国家」の圧倒的優位
権力を集中した国王は領域内で自らの上位者を認めない「主権者」として君臨
→主権国家 $\left[\begin{array}{l} \text{国際的には各国が平等} \\ \text{国内的には様々な主体を階層的に内包} \end{array} \right]$ の成立
- ・明確な国境線の画定により相互排他的な領域の区別が可能になり、主権国家の「内」と「外」の区別が明確に

②イデオロギー面

- ・中世におけるキリスト教のように単一の普遍主義的思想が勝利を収めることは無く、絶えず複数の普遍主義イデオロギー間で抗争が繰り返される
(ex.カトリック対プロテスタント、ナショナリズムと正統主義……etc)

- ・対立する双方が聖戦・正戦意識を持つが、いずれが正しいか判断することは不可能
→戦争の善悪を判断するのは無意味
- ・複数の普遍主義が存在することにより権威の存在が成り立たなくなり、権力の有無が問題となる

③経済的相互依存の進展

3. 「新しい中世」の登場

ヨーロッパ中世の世界システムと近代世界システムを

- ①主体の特徴
- ②イデオロギー状況
- ③経済的相互依存

の3点で比較すると、どちらがより現在の状況に近いか？

①・巨大企業やNGOなど非国家主体の重要性が増大

- ・領域性については形式的には変化が無いが、世界システムにおける意味は低下
- ・国内問題と国際問題の区別も困難

⇒ 中世に近い

②・自由主義的民主制・市場経済のイデオロギーを根幹から否定する有力な対抗イデオロギーが不在

- ・国連は軍事行動を
 - 1)国連の集団的措置のための戦争
 - 2)自衛戦争
 - 3)侵略戦争

の3タイプに分け、1)と2)を正しい戦争、3)を正しくない戦争と分類

- ・国連憲章で国家間の主権平等を原則として打ち出すが、現実的には区別が存在

⇒ 中世に近い

③・中世は情報・航海などの技術水準が低く経済活動は局地的だったが、現代は航空機やコンピュータなどの情報技術により各国間で活発な経済交流

- ・多国籍企業は生産の各段階を世界各地で行う水平分業が確立

⇒ 中世とは異なる

∴①～③より

「現在、ヨーロッパ中世とまったく異なる技術水準のもと、世界政府（世界帝国）でもなく、また主権国家システムでもない、少なくともヨーロッパ中世と比較可能なような相互依存の形態が生まれつつある。」（『新しい中世』219頁）

【参考文献】

田中明彦 2003年『新しい中世—相互依存深まる世界システム』（日経ビジネス人文庫）

山本雅男 1992年『ヨーロッパ「近代」の終焉』（講談社現代新書）